

Remember 9.19!!!!

日本を再び戦争が出来る国にたくない！強い意志を共有している皆が国会前に集まっていました。安保法案が可決されてしまうかもしれないという大きな危機を目の前に違いを越えて協力しよう！という皆の思いが感じられたのは素晴らしいことでした。

しかし、9月19日の未明、法案は可決されてしまいました。それも、正々堂々という姿からはほど遠い形で、憲法違反を多くの学者さんから指摘され、何万人という国会前に集まった人達や、全国で立ち上がり声を上げている多くの方々の魂からの反対意見を無視する形で決められてしまった安保法案。悲しく厳しい現実を目の当たりにしました。

「Remember 9. 19!!!!」ですね！
今までは、与党の方々の良心に少しは期待して、交渉をしていたわけですが、システム上それは不可能であることが今回判明しました。現実的には来年の7月に行われる参議院選挙で与党が、この暴挙の上に勝利するような事があつたらかなりマズイかもしれません。他にも TPP の問題や放射能の問題もあります。来年の選挙の前に平和を求める人達が、違いを越えて Unite するしか平和を守る方法はないようです。なるほど！そういうことなら！Unite する為の智慧ならば僕たちは沢山持っています。いよいよ、私達の出番かもしれませんね☆彡



2015 秋 第 2 号

戦後七十年平和への道

7月7日から8月9日の間、戦後70年、原爆70年を記念して、戦没者供養と平和祈願の為のウォーク「7 Generations walk for peace 2015 広島↓長崎」をさせていただきました。多くの方にご賛同とご協力をいただき、お陰さまで無事に歩き終えることが出来ました。ありがとございました。
8月10日〜9月15日までの間、渡米して、サンダンスに参加したり、聖地やネイティブの人達の所を訪ねて、母なる地球の上、命の道を美の内に歩いて行く智慧を学び帰ってきました。そして、2015年9月18日、私は国会の前にいました。安保法案が、まさに可決されようとしていて、法案に反対するデモをする為、何万人の人が毎日集まり、国会前は平和を求める人の熱気で溢れていました。

remember 9.19 Let's Unite for Peace

庶民の眼から見た戦争

東京大空襲の語り部の二瓶さんは言いました。
「戦後から70年。私は戦争というものがどういふものか知らない人が戦争を起こすのだと思います。色々な視点があると思いますが、庶民の目で見えた戦争、その中に本当の戦争の姿があります。戦争とはどういふものなのか？それを伝えて、戦争だけは食い止めなければなりません」
私は歩いて戦没者に祈りを捧げながら、体験者にお話を聞くなどして、その壮絶な事実の一端を知る機会を与えられました。その学びの中で「戦争とは表現することが難しいくらい残酷で、どうしようもない悲しみと絶望のかたまりである」と感じました。特に現代の戦争は戦争と言うよりも大量虐殺の繰り返しですし、その悲惨な悲劇を引き換えにして、得るべきものなど何もないと確信しています。まず、絶対に変えてはいけないのは、戦後70年守り続けてきた「戦争はしないという前提」です。
その上で如何に自分達の国を守ろうか？と考えまとめられたのが、日本国憲法なのです。

「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。」憲法前文にもこう書いてあります。他を疑って、暴力を呼び込むよりも、皆を信頼し愛して、平和を守っていこう！という決意が述べられています。僕も心から賛成ですし、それが、平和を守る上で一番大切なことだと思うのです。

それには、私達が本来一つであることを思い出すことが大事なのだと思います。私にとって「思い出す」とは、すでにある現実には気づき直すということ、それは段階的に起こりました。先ず、現実を見ようとすると、ハードな部分や残酷な部分が見えてくる場合が多いですね。平和を考える場合、戦争がまさにそれです。実際に各地を歩いて巡り大切な学びを得ました。空間が繋がりを、過去と現在と未来が繋がりました。リアルなその教訓を忘れなければ戦争をきつと防げると信じています。そして「今ここ」とも繋がりが直せました。母なる地球、空、水、風や愛と繋がりが直すことができました。事実を知るといふことは、悲劇を直視することにもなりますが、同時に命の感動を取り戻すことにもなるのです。そうすると、あまりにも命が輝いていて、力強く、自分のエゴなど小さすぎて笑ってしまうほどで、そして、私達が本来一つであることを思い出すことが出来る経験をしました。如何に事実に近いのか？そこにUniteと平和の鍵があるのです。

発行者 7 Generations Walk
代表 山田圓尚 mail 7gwalk@gmail.com
7 Generations Walk はネイティブアメリカンの「7 世代先の子供達の事を考えて今を生きよ」という教えをもとに日本中や北米を歩いてメッセージをシェアしています。

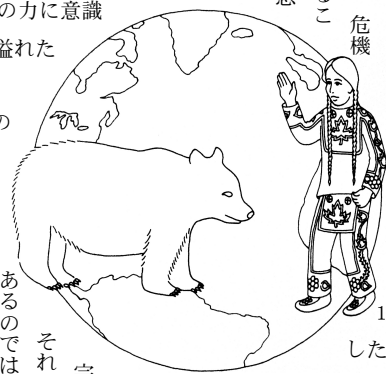
<http://7gwalk.org>

～ 7 Generations Walk コンセプト 2015 ～

☆
人間社会を命の道に戻していく為に
命の源と繋がっているムーブメントを続けて行きたい。
命の奇跡を実感し、満たされている人達と共に
今この大いなる変化の時
ご縁ある日本の土地で

母なる地球との繋がりを保ち調和の内に命の道を歩み続けることで
7 世代先まで持続可能で健康なコミュニティを再構築したい。

☆
人は物質的、合理的な充足だけでは満たされません。生命はいつか死という極めて非合理的なものを迎えなければならない運命にありますから、人生の最後には物や地位などは全て諦めなければなりません。ですから、それ以外に価値観を見出せない場合、恐怖や不安から逃れられず、満たされることなく、常に、もっともっとと求め続け、奪い合い、戦争をすることになりかねないのです。それでは、生命の神秘や奇跡を理解しようとしている人はどうでしょうか？太陽や湧き水や植物を見ても分かるように、命の力は常に湧きだしています。そのサイクルは無限とも思えます。無限は非合理的ですが素晴らしいものです。その命の力に意識が向いている人は、分かち合いたくなり、愛に溢れた活動をして行きます。私達には社会的革命が必要ですが、それは、このような愛の力によるべきだと思うのです。



メディスンホイール

1978 年、アメリカ横断の Longest walk に参加した大鹿村のカズさんから聞いたお話です。

インディアン撲滅法案が可決されそうになっている危機を目の前にネイティブ達は祈っていたそうです。カズさんは「どんなお祈りかな？大統領をやっつける！とか白人を倒せ！というお祈りなのかな？」とも思っていたそうですが現実は全然違いました。ネイティブ達は大統領の幸せも、その家族の幸せも、白人の幸せも祈っていたそうです。
メディスンホイールの教えに従い、四つの色の人種の人達全てが輪の内にあり、それぞれの役割があるけれども、全ては繋がっていることを心から理解していたからこそその祈り！なんて、高次元で崇高でリアルな祈りなのでしょう！カズさんは「この運動は成功する！」と直観し、やはり大成功を収めました。母なる地球の上で皆で分かち合って幸せに生きること！それがネイティブの願いですので、その願いが成就すれば、大統領も含めた皆が幸せになりますものね。
ネイティブは「母なる地球と自分の関係性を先ず学んでから、行動しなさい」と教えてくれます。母なる地球の愛は私達のエゴや弱さを包み込んで愛しつくすほど、大きくて強いことをネイティブは知っていたのです。だから、そんな風に祈れたのかもしれない。私達に今、必要なことはそんな、真実に目覚めることかもしれませんね。

戦争に負けない愛の力を

それは、集団意識にコントロールされ、与え合う喜びを無くしてしまうところにあるのではないのでしょうか？そしてそこには必ず奪い合いや不正がはじまります。私達は一人一人が「無限と繋がっているが故に、分かち合いたい」という意志と喜びのもとに集まる集団であるべきと思っています。何故かという自然がそうだからです。自然社会は愛の循環でなっています。木々や草花やありとあらゆるものが対価を求めているわけではありませんが、与えあって無限の循環をうみだしています。それが命の道です。それが持続可能な人間社会の意識的な基礎になるべきですし、活動もそのようにあるべきですね。そのような愛の循環と繋がりを産み出す活動をして行きたいです。私達は戦争の悲惨さや残忍さに負けない、愛と生命の強さを共有している繋がりを保たなければなりません。その繋がりを保つ方法として、ネイティブは祈ったり、歌ったり、踊ったりします。自然とも人間ともあらゆる生命ともそのように繋がってきました。私達は祈り人であり、歌うたいであり、ウォーカーです。これからも、祈りと歌とウォークを通して、そんな愛の繋がりを強め具現化していく役割を果たして行きたいです。どうぞよろしくお願ひします。
ホームミタクエオヤシン



語る事の尊さ

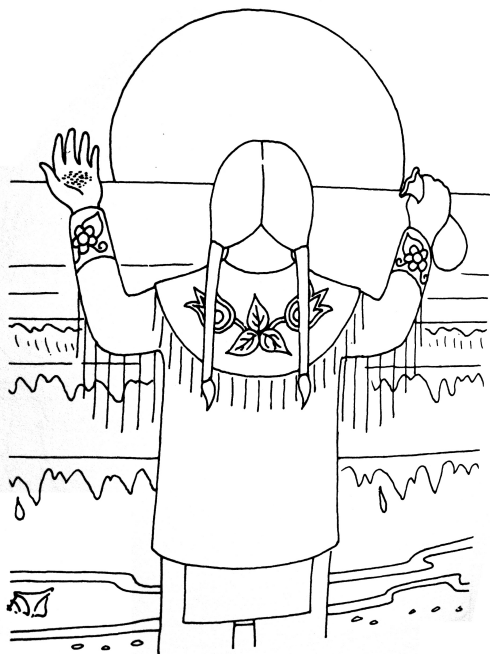
ウォークでいつも思うのですが、真実はやっぱり現場にあります。情報だけでは現実を知ったことにはならないですね。直接聞いたお話には魂のメッセージがありました。情報は真実へのリンクであって、そのものではないですね。

そして、現実を適切に受け止められる、感性も大切です。しっかりとグラウンディングしていないと、戦争に関わることは、眼を背けてしまいたくなるくらいハードな面もあります。戦争のことを敢えて語るには、勇気と智慧と力が必要です。何故語らなければならないのか？という意図もしっかりと平和と繋がっていないと語り続けることは難しいと思います。ですから、戦争の語り部の方は人間的に立派な方が多いです。私達もそんな方々の徳に助けられて、多くを学ぶことができました。精霊にとってもその犠牲を教訓として活かされるのが、何よりのご供養になるでしょう。

私達は事実を語り継がなければなりません。そんな意味も込めて、聞いたお話を少しシェアできればと思います。

ウォークの後、アメリカのミシガン州でネイティブアメリカンの儀式「サンダンス」に参加していました。サンダンスの期間が8月13〜16日のお盆と終戦記念日にちょうどかかることもあり、精霊と共に祈り踊りたいという気持ちで強くあり、素晴らしい機会を与えられたことに感謝していました。長老のパーキングドック師が言いました「サンダンスのサークルの中は次元を越えている。過去の精霊も、今の精霊も、未来の精霊も共にあるから、深く折る気持ちになれるのだよ」なるほど！そう思っって祈りはじめると、確かに精霊と共に踊っている感じがします。そして、多くの思いや祈りと共に踊っている感じがします。母なる地球の愛と、木々や草花の愛と、動物達のたくましさと共に踊っている感じがします。4日間断食断水で続けられる祈りですので、もちろん体力的には厳しい時もありましたが、今回はウォークで浄化されていたせいか、そんな力とすつと繋がれたような気がして、最後は、精霊と共に命の真実に喜び、感謝し、祈り、踊りあげられた感じがして母なる地球と芯から繋がりが、美しい空の方に抜けていった感じがしました。そして気づきました。「私達はすつと繋がっていたのだ」と。サンダンスという命の世界そのままの祈りの場で、皆と共に目覚め、力に溢れ、感謝の歌を歌い、踊れたことに感謝しています。ありがとうございます。

サンダンスでの経験



そして、長崎にゴールした時に、私達の頭上に虹が出ました。ブログなどで写真を見ていただいた方もいると思いますが、ホントに不思議で美しい光景でした。多くの人の思いと、そして精霊と大いなるものに見守られてゴールできたのだと実感しました。そんな風に真摯な平和への思いは、繋がっていますし、これからも繋がっていきます！ウォークの詳しい報告はブログにも掲載されています。是非そちらもご覧下さい。

広島在住で原爆の語り部、川本悦子さん

原爆が爆発した瞬間、家の壁が黄色く光って、そのあとドカンという爆音が出て、母は吹き飛ばされました。そして、気がつくとも倒壊した、家の壁と壁の間に挟まってしまっって動けない状態でした。父は何とか母を助けて屋根の上に持ち上げることが出来ました。そして、屋根の上から、爆心地の方から逃げてくる人々の列を見たそうです。皆、無言で、体中の皮膚が解けぶら下がった状態で歩いて来られている方。服も焼き飛ばされてしまっています。その酷い姿に、近くに来てやっと人だと分かるような方も多かったのです。父と母と兄は奇跡的に助かり避難することが出来ました。そして、三日後に広島市内の黄金山裏の日宇那にある親戚の家に辿り着きました。そうしますと、そこではお葬式が行われていました。叔父の奥さんフミさんのお葬式です。フミさんはとても美人だったそうです。原爆が落ちた時、勤務

奉仕で市内にいて、避難道路を作る作業をしていました。心配になった、叔父がフミさんを探しに行きました。市内には全身が焼け爛れた人達が沢山横たわっています。叔父が歩いていくと、足を掴んで来る方がいたのです。顔中が焼け爛れ腫れ上がってしまい、酷い状態でもう誰だか分からないような状態だったそうです。でも、叔父には分かったのだそうです。その人がフミさんであることが。そしてフミさんは震える声で言ったそうです。「こんな顔になってもいい？」叔父は「いいよ」と言って、奥さんを家に連れて帰ってきたのですが、やはり直ぐに息を引き取られたのです。川本さんは新聞に記事を投稿したり、小学校でお話をしたりしてこの戦争、原爆の事実を伝え「平和とは？どうしたら良いのか？」と問うて来たそうです。「やはり人は助け合うべき。貧しくても少しの食料を分け合って暮らしてひる人達もいる。そんな心を世界中の人が持てば、良いのではないか？」

歩き終えて

今回のウォークで凄く感じたのは、道ですれ違う方々の反応が今までのウォークの時とは大分違ったことでした。歩いている時は「広島原爆の火」を持ち「戦没者供養 平和祈願 広島↓長崎」と書いてある旗を持っていました。大きなバックパックを背負った集団が、歩いて長崎を目指している？！確かに、不思議そうな顔をして見送っている方も多くみかけます。でも、今回は話しかけて下さる方がいつもにも増して凄く多かったです。そして、事情を話すと、戦争の体験談を話してくれたり、「頑張れ！」と応援して下さった長老の方々も多くて、勉強にもなりましたし、凄く励みにもなりました。今でも、その顔と感じを思い出すと胸が熱くなります。戦後70年の、今、この時、社会情勢を見て危うさを感じ、戦争の教訓を活かして、平和を守らなければならぬ！という思いが社会全体で盛り上がりつつある事を実感していました。安保法案に反対して、国会前や各地でデモに参加されている方々の強い思いはもちろんですが、こうして、なかなか動けないけれども、同じように戦争を危ぶみ、平和への強い思いを持っている方々が沢山います。その方々の事を忘れてはいけません。そうですね。そのような思いに後押しされて平和は守られていきますし、私達も歩かせていただきます。



<http://7gwalk.org>

岩国空襲を語り継ぐ会 の森脇政保さん

森脇さんはその当時、広島港沖の柱島群島に住んでいました。そこは7月24日に爆撃されました。特に酷かったのは、子供を狙った爆撃でした。黒島への爆撃は特に悲惨で、その時、子供達が防空壕に逃げ込んだのを確認した米軍機は、その防空壕目掛けて250キロ爆弾を落とされたそうです。防空壕は壊滅。中で子供達の泣き叫ぶ声が聞こえたが、空襲中で救助に行けず、最後の子供を壕から出したのは夜9時を回ったのだそうです。その中にいた子供達は全員生き埋めになってしまい、口などは土で塞がれていたそうです。その惨たらしい惨劇の前に親達の涙は出尽くすほど出たそうです。そして、柱島にいた森脇さんもグラマン機の機銃で狙われ、頭の直ぐ上を弾丸が通っていたそうです。もう少し背が高かったら死んでいたのだそうです。しかし、森脇さんはその事は当時怖くなく、神風が吹くことを信じ、特攻して死ぬのが使命と思っていた軍国少年だったのだそうです。それで、私が「いつ軍国少年が反戦家になったのですか？」と質問しました。そうしましと森脇さんが「終戦後に戦争の事実を知るにつれ、軍国少年は、反戦の活動家に徐々に変わっていきました」と教えてくれました。アジアに対して日本軍が何をしたのか？アメリカと日本はお互いが強盗。どちらが領土を取るか？争っていた。そんな、真実を知り、自分の体験と照らし合わせると段々分かってきた。そして、二度と戦争をしてはいけないと思うようになった。

山口県 徳山 本正寺 住職の戦争体験談

徳山には海軍の燃料基地があり2回大きな空襲にあっています。1945年の7月27日の夜中〜28日市街地が空襲されました。寺の境内の防空壕に逃げたが火の手が迫ったので、壕から出て逃げました。寺に帰ってみるとお堂は焼けてしまっって跡形もありませんでした。次の日、お寺の境内で遺体の火葬が行われました。木を組んで遺体を一列に並べ、上にトタンをかぶせて火をつけます。一番端の三体の遺体が見えていたので、印象にのこっています。一人は頭に八角形の焼夷弾が突き刺さっていました。まるで頭から焼夷弾が生えているかのように異様でした。もう一人は母子でした。こちらは無傷なのですが、母が子をおんぶしたまま亡くなっています。おそらく煙にまかれて窒息したのだと思います。そしてもう一人は黒焦げになっていました。服も焼け裸の姿は無残でした。そして、火をつけると異臭が辺りをつつみましました。次の日に火葬した場所に戻ってみると、燃やすための木が足りないせいか、遺体が燃え残ってしまったままです。頭蓋骨や足首などが転がっています。あまりにも気の毒なので、その遺体の燃え残り部を集めて、墓の一角に穴を掘り埋めたのです。その当時12歳、良くやったと思います。「戦争は酷い！二度と起こしてはだめだ」今回のように法律が変わったら一般民衆のなんでもない人が死んでいく